The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	美学は言葉を考える
Author(s)	高安, 啓介
Citation	a+a 美学研究. 2018, 12, p. 153-153
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90120
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

美学は言葉を考える

高安啓介

哲学の一分野としての美学はもとより感性学であるとはいえ、美学の仕事はじっさいには言葉について吟味する仕事だったのではと思わせるところがあります。美をめぐる議論はじつのところ美という語をどう理解したらよいのかという議論だったのではなかったかと。美学はたしかに意識哲学の文脈のなかで育まれましたが、言語中心に考えてみたい理由は、私の場合とてもプラグマティックです。学生の皆さんは学んだ美学をどう生かせるのでしょうか。一つ考えられるのは、コミュニケーションの媒体となる言葉の理解をとおして、研究者・芸術家・生活者のあいだの相互理解をうながす役割を果たせるようになることです。たとえば、次のように問うてみましょう。自然の美とはそれほど自明なのか。アートは芸術と同じなのか。人間はそもそも何かを創造できるのか。カワイイとはどういう状態なのか。以上のような問いは、結局のところ、言葉の使用にかかわる問いであると考えられます。美学のこうした言葉の吟味によって、異なる立場の人々が少しでも理解し合えるようになり、多くの人々が共通の議論に参加したり、多くの人々が共通の活動に参加したり、参加の可能性が増すならば、美学がけっこう役に立っているといえます。あたりまえと思っている言葉こそ、語源にさかのぼって本当の意味を知ったり、含まれる意味どうしの矛盾に気づいたり、状況に応じた意味の違いを明らかにできたとき、あたりまえがあたりまえでなくなる。そしてそのようにして、新たな議論へとみちびかれ、新たな行動へとうながされ、気づかぬうちに新たな次元に立たされる。これこそ美学のユートピアではないでしょうか。